



生涯教育

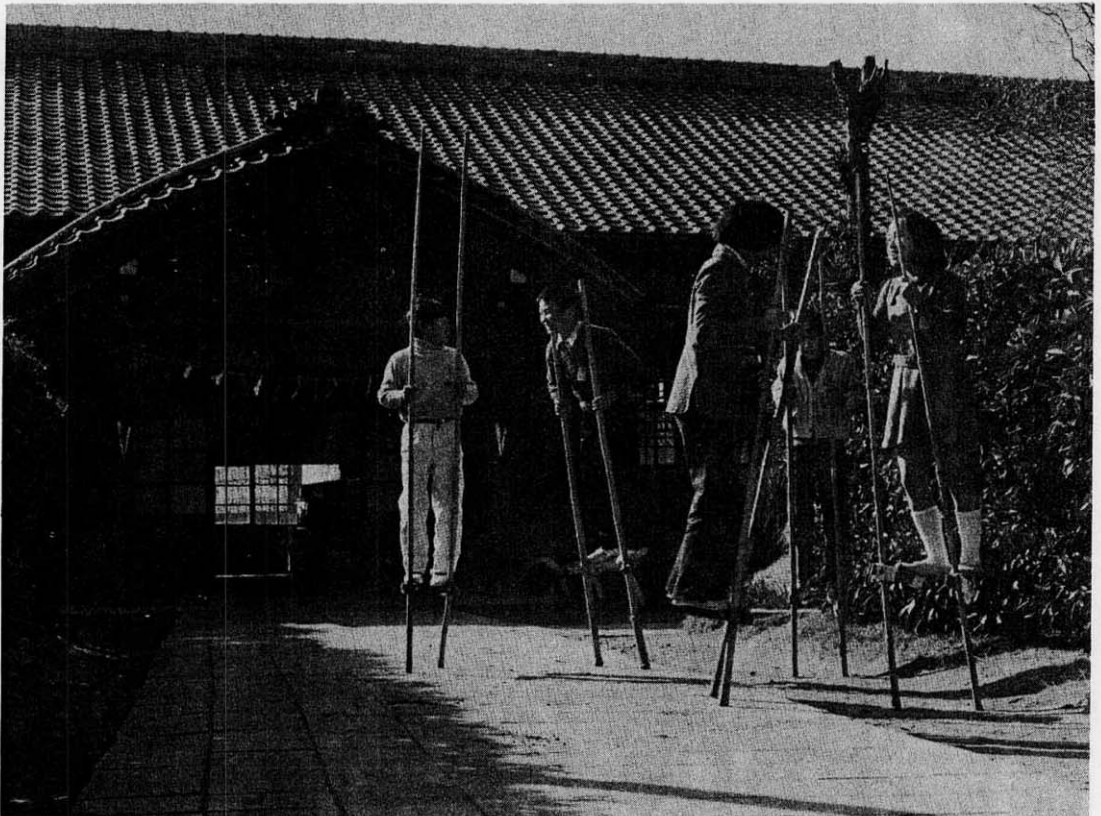
ユネスコの成人教育部長
 ボーラングランの提唱の
 教育論である。

小生など七十一歳の新春
 を迎えたこの年になって、
 知らざることのあまりに多
 きをなげくものである。
 実に人間は、死ぬまで勉
 強である。

岡崎美術協会会長

中西正雄

昭和50年1月1日 / 編集 / 発行 / 岡崎市教育委員会



(唐破風の玄関のある学校 矢作西小)



— 教育随想 —

賀状の心

戸田提山

年頭になると早々に年賀状が配られる。一枚一枚とめくってその人の安否やら、このごろの消息を想像するのは楽しいことである。その返事を書くということになると忙しい時にはこういう習慣がなくなつたらいいのだがとつい思ってしまうが、中に心温まる言葉が添えてあったり、巧拙は別として一画一画大切に書いてあるのに接すると、何かこちらからも誠意のこもった返事を出したいと思う。

そのくせ、年末の締め切りに間にあわせて出すこちらからの年賀状は印刷したもので、せめてその中の「賀正」の二字は写真印刷にして、わずかではあるが現在の心境をお届けしますという意をこめて、お許しを願っている次第である。

だから毎年、「賀正」の二字はデザインが違ふ。あまり変りばえのない時も

ある。そんな時は不勉強の時と思つてもらうことにしている。

全部を筆で書いていたころは、はじめの二、三枚のうちにはいいのだが、何枚と書き進んでくると、きまって乱暴な字になつて失礼も度を越したものになつてしまった。

「字は大切に書かなくてはいけない」と思つても、時代の動きには勝てないものらしい。字を鄭重に書かないどころか、画一な印刷に代えるなどというところは、やむにやまれぬところだがどうも情ない仕儀である。

書の方の師匠や先輩へも失礼ながら同じように印刷の賀状を出しているが、それに對して、ある方は全部毛筆で書いて送つてくださった。大部分は私のように印刷だった。返事をくださらない方もあ

る。

そのどれにも事情を思い、見識を感じたけれども、全部毛筆の返事をくださつた方に對しては恐縮して、つきからはこちらも鄭重に筆で書いてお送りすることにした。

そしていただいたその方の賀状は大切に、いつかまとめて表装するつもりでいる。

表装といへば、葉隠だったかに、先方で表装されて床の間に飾られてもいいという覚悟で手紙を書けというところがあつたが、葉隠のいうのは、上手に書けというのではない。常に心境を整えて不動の心でおれということだと思ふ。

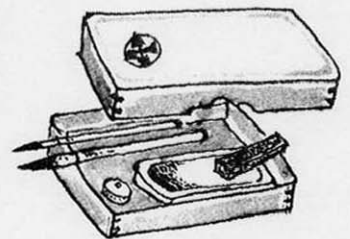
一筆一画の中に、心のすべてがこもつた字は、その巧拙よりも人の心を打つもので、短かい賀状の文字の中にも十分真意は送り届けることができるものだと思ふ。

人は上手な字を願う。立派な字といへばやはり上手で心のこもつた字のことをいうけれども、相手の心を打つ段になると、何も巧拙は問題ではなく、却つて拙の方に親近感を覚える。

ある人が、日常のペンの文字でも、それはその人にとつて重大な一つの歴史であるから、心して書くべきであることにこのごろ気づいた、と言つておられたが、年賀状ばかりでなく、いつも一つ一つの字を大切に書きたいものだと思ふ。

(書家・日展会員・審査員)

習字



いまはむかし

・習字・書き方・書写・書道

一般には①実用としての文字教育(明治初年〜明治中期)②国語能力としての文字教育(明治後期〜昭和初期)③芸術的表現力としての文字教育(昭和国民学校令下)④国語能力としての文字教育(戦後)と、四つに区分されている。

・手習童子訓

「机をすなほにしかと置き、硯の水を八合入れ、墨の順逆すり流し、筆染め固く持ち、手本に似せて習ふべし。かくの如き輩は、十年そい(疎意)の学よりも、一年真実の徳は、拔群に優れて養るなり」(畔柳縫右衛門 作より)

この頃の手本には、数字や十千十二支、苗字、地名、日用品名、書類作法などが多い。「甲乙丙丁戊巳」とか「岡崎町籠田・常磐村瀧・岡崎村柱」などがみられる。

・千字文の書写

師範学校の夏の課題に、千字文の書写が出されて、生徒として夏のさ中、まっ



滝山寺の鬼まつり

滝山寺の鬼まつりは毎年旧暦元日より七日間、薬師堂において天下泰平五穀豊饒を祈る修正会を行ない、その結願の夕すなわち、七日目の晩に行なわれる。

(今年は二月十五日土曜日)

その起源は古く鎌倉時代に始まり、一時中断したものの再興され今日に至っている。

この鬼まつりはもともと幕命により行なわれたもので参詣人も身なりを正し、

暗夜といえども提灯も用いず厳肅に行なわれた。当時は露天商の店等も一切禁止されていた。しかし、明治四十二年にはそれも許可されている。

尚この鬼まつりは明治二十九年三月に愛知県無形文化財に指定されている。

このうたは「田遊祭」の中でコッポメの「早乙女も参ろう、朝から苗を取ろう」という声にに応じて太鼓を打ち拍子をとりながらうたわれるものである。

唄 (一)

Musical notation for the first song. The lyrics are: あゝあゝあゝえとほろにほ きはらまのほ

唄 (二)

Musical notation for the second song. The lyrics are: にし のー うみーや にし のー うみーや
か きは ま ぐりめー ぼごの
は ると の わかめー ぼごの

唄 (一)

朝苗を取るには さはらよのなえ
ゆかや 手に手とゆくよの
コッポメ

「苗は取つたて白鉄を合わせ植えて
参らしよう。」

けんりんりりとおんと びんかは山
田を植えななかへかへれよなへほ
栄へ行く世の
一人の曰く

「西の海へかかってかきはまぐりを
とつて都廻りをしよう」

唄 (二)

西の海イヤア西の海イヤアカハマ
グリ めなこのカキハマグリ
めなこの鳴戸の 若めなごなるとの

若めなごの 何駒にやー何駒にやー
手綱をかけて なごの手綱をかけて

なごのおしぐの島をめぐる
なごのおしぐの島をめぐる

なごのおしぐの島をめぐる
のりしずめたるなごの

のりしずめたるなごの
海女にといいや 海にといいや

都へなびけなごの
都へなびけなごの

我もなびかアやー
我もなびかアやー

青い雲のたなびくは
この理かや

水晶のたなびくは
星かとよしげの好いかや

裸になつてがなはつた思い出をもつて
いる人もある。

当時の小学校の手本(国定書)は、い
わゆる「ノメクタ」手本で、日高秩父・
山口半峰・鈴木翠軒・高橋竹堂の諸氏が
書かれたものようである。「呉服・為
替・早速積出」などを記憶している人も
ある。

小学校一年は、かたかな。二年はひら
がな。三年以上は漢字かな混じりの文字。
文字の大きさは、一年一三年が四六字
の大字。四年は八字の中字。五六年が
十二字一ページ一行十三字、一行十六
字の細字と、段階的に配列されていた。
・皇国主義・国家主義

国語科「書き方」が独立して「芸能科
習字」として扱われた国民学校時代は、
教科内容に「よせ書千人針」や「大和心
武士道」などがある。手本は井上桂園氏。
この頃にも「茶の湯いけ花禮法」とか「み
よし野やさくらの中のもの」とも
も書いている。

・指導法や用具

ひととき(昭和二十三年頃)は、硬筆
指導が中心となった頃もあったが、毛筆
が「書くこと書写」の中に必須として復
活したのは、昭和四十三年以降である。

チョーク示範、水書板、白塗板による
指導から、ちかごろは、OHPなどを使
つての師範が考えられるようになり、書
写指導の近代化が試みられている。

(高橋孝・鈴木祐男・中尾劔一先生
のお話から)

目で見る岡崎のあゆみ

— 明治・大正のころ —



明5・8



明4・7・17



明4・7



明2・6



明2・3



明15



明11・12・20



明10・11



明9・8・19



明8・4



明5・11・27



明22・10



明22・2・11

納札



明17・3



明17



明15・6



明38・5



明32・4



明30・7



明29・9



明29・4



明23・4

納札 (のうさつ)

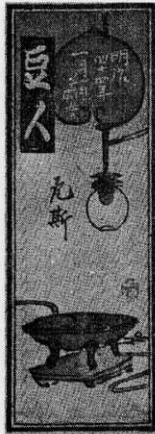
社寺を巡礼し、自分の姓名などを書いた札を納める風習は、平安末期からあったらしい。

札の上部に仏や菩薩像、中央に三十三所巡礼など、左右に年月日と生国・姓名を書いた。

江戸時代で大流行。自己の記録を誇示し、神仏に印象づけるため、彩色して人目につく奇抜な場所に争ってはりつけるようになった。

その後、趣味的流行となり、種々意匠をこらしたものを木版刷とし、同好者の間で月々交換の会が開かれるまでになった。

(資料提供 深津時二郎氏)



明44・1・1



明43・3



明40・3



明39・4



大5・11・16



大5・10



大4・4・17



大3・4



大2・10



明45・7

情報化時代の明暗

京都府立大学教授

樺島忠夫

人間と動物とはどのように違っているのでしょうか。普通、人間は道具やことばを使っていると考えられております。ところが、最近の研究によると、ある種の動物は、道具らしい物を使ったり、ことばらしいものを使っていることが認められております。ところで、人間の使うことばは、動物のことばと、やはり違っているのです。人間はことばによって、動物とは別の世界を作り上げてきたのです。詩、文学、哲学等の精神文化を物質文化以外に作り出したのです。

人間は、なぜだろうと考えます。解釈しないと落ち着かない性質を持っています。知識を蓄えて解釈をしているわけです。知識をため、情報を伝えるのは、ずいぶん苦勞をしてまいりました。最初にくふうしたのは文字で、これは、今日のコンビ

ユーターの発明より、むしろ、偉大な業績ではなかったかと思われるほどのものです。以後、印刷術、写真、電信、電話などを次々に考え出しました。情報を伝えるために、苦勞して情報化社会を作り上げてきたわけです。

人類の最初の社会は、農業を中心とする物質の文化でありました。次いで工業化社会となり、物質とともに、エネルギーが重要視されるようになりました。現在では、物質とエネルギーと情報がたいせつなものとなっております。現代を職業の面からみると、教師とかアナウンサーなどの情報に関する職業の比重が大きくなっていると言えましよう。

情報化の歩みは、バラ色の夢を人々に抱かせたものでした。ところが、情報化社会はよい面ばかりでなく、悪い面も持つて

いることに気づくようになりました。「情報福祉社会」であるような現象がみられるようになってきたからです。

その第一にあげられるものは、プライバシーの侵害です。次は、最も心配されていることで、情報を多くの人が受けとめているうち、考えることが弱くなってくるのではないかといいながら、口べたな子どもたちが多くなっていることなどは、その例です。

情報化社会の特長として、情報が商品化することがあげられます。少数の情報生産者が、多数の情報消費者に情報を流します。

日本人は、昔から知識を吸収して持っていることに価値をお

いたようであります。また、沈黙が美であるとも考えていました。だから、ものを言わない習慣ができてしまったのでした。現在の日本人も、知識をとり入れたり、絵をかいたりすることはあっても、ことばで表現するということが少ないように思われます。

たとえ、情報を取り入れたとしても、発表したり、文章を書いたりしなくては、頭の中で腐ってしまいます。中学校の教科書は、ずいぶん厚く、それを読むだけでたいへんです。だから、ほとんど作文指導などやっていないのが現状ではないでしょうか。考えることは、人に任せてしまつてはだめで、自分で考える力をもつとつけなければなりません。

ません。炊飯器でないと、ご飯のたけないう人が多くなっているように、自分でものを考えられない人が多くなっていることも事実です。私たちは、考える力を人間のものとして、社会を作り上げるように努力すべきです。人間がものを考えるためには、発展的思考、収束的思考、評価の三つの能力が必要です。特に文章を書くためには、この三つの思考を最大限に活用しなくてはなりません。

学校の作文指導の中で、こうした考える力を育てることができるとは、

※第二回教育文化賞記念講演
十一月三十日

岡信中央支店ホール
(文責 編集部)

かがみ

温かい手

柳沢ゆみ

東岡崎発、梅園経由、大樹寺行きのバスは、毎朝、二つの高校、附属小学校、養護学校の児童生徒で超満員です。

その日は、発車間際に、中のドアから無理に足をかけて乗り込みました。ドアにはさまれないように、身を小さくしておりましたところ、私の肩に上から手がのびて、バスから落ちないように誰かがささえてくれました。背中すれすれにドアがしまり、ほっとして顔を上げて、「ありがとうございます」と言ってみたりしました。その温かい手は、養護学校の男子の子の手でした。恥ずかしそうに笑っていました。

人が困っていたら手を伸ばして助けてあげるといふやさしさ。できそうのできないそんな簡単なことを彼の温かい手から教えられたように思いました。

(梅園小)



シクラメン

自主的な研究・記念行事

— 視聴覚部と図書館協会で計画 —

教育機器の充実と効果的な利用研究で意気あがる視聴覚教育研究部と、二十年にわたる研究推進の歴史を誇る岡崎図書館協会が、次のような自主的な行事を計画し準備を進めている。

【岡崎市放送教育研究大会】▽期日 一月十七日(金)▽会場 三島小学校▽テーマ 放送の果たす教育的な役割とその効果を確かめ、併せて教育の現代化に対応する教育機器の開発を認識する。▽参加者 市内及び三河部教職員と市内小中PTA会長及び婦人研修員▽内容 公開授業、全体会、研究発表、分科会、講演「教育の現代化と放送教育」前文部省視聴覚教育課専門員有光成徳先生※なお大会と併せて教育機器展を開催する。

【岡崎図書館協会創立二十五周年行事】▽期日 二月一日(土)

【郷土館の刊行物と行事】

▼郷土館報
毎号地方史研究会員の研究を中心に郷土資料、郷土館だよりを掲載した貴重な郷土研究誌。月刊八ページ、現在二十五号。

▼研究紀要(第三号)
岡崎地方史研究会

「岡崎藩町政における自治法制」「浄瑠璃姫の研究」のほかに菅江真澄関係二つの論文、市内寺院文書目録などがあり興味深い。A5判八二ページ。頒価四百円。郷土館で扱っている。

▼大藤鎮太郎氏遺品展
三月二十日まで郷土館で開催

【初めの学校図書館教育奨励賞】

県教委と中日新聞社主催による学校図書館コンクールは、本年度から「東海三県学校図書館教育奨励賞」となったが、本市から藤川小が管理運営部門優秀賞に、甲山小が地区奨励賞に選ばれ、十二月二十一日名古屋中日ビルで表彰を受けた。

【一月の研究発表校】

【福岡小】二十一日(水)
▽主題 ひとりひとりの能力を高める学習指導▽内容 公開授業、研究発表、分科会、全体協議/講演「教育の過去と未来」国立教育研究所内田純先生(岡崎市舞木町出身)

【東海地区学校事務研究大会】

▽期日及び会場 二月七日(市民会館) 二月八日(勤労会館)
▽主題 学校事務の主体性を確立し教育の向上に努める▽内容 〱(七日) 開会式、分科会(八日) まとめの会、講演「明治百年に忘れたもの」岡崎市教育委員長松野尾潮音先生。

【二厚志三件】

▽絵本スターターブック イギリスで出版された幼児、低学年向けの権威ある絵本の日本版。三〇巻のもの三四セット。図書販売会社はるぶ岡崎営業所(山崎音一 所長)からご寄贈。

▽教材テープ「ガスのお話」ガスの作り方、使い方、歴史と将来など四巻三五セット。小学校の理科社会科家庭科用に好適。岡崎ガス株式会社(松井徳三社長)からご寄贈。

▽雑巾三千枚 昨年に引き続き心こもった手作りの雑巾三千枚。小中学校へ配布。愛知主婦同盟岡崎支部(代表京極登己枝さん)から。

昭和49年度教育論文応募状況

種別	小学校		中学校		計	
	個人	共同	個人	共同		
教科	国語	19	25	7	1	52
	社会	11	8	7	6	32
	算数・数学	7	4	1	7	19
	理科	10	7	4	5	26
	音楽	1	1	0	2	4
	図工・美術	2	0	2	1	5
	体育・保健	7	6	2	5	20
	家庭・技家	1	0	5	3	9
教科外	英語			4	4	8
	道徳	2	1	0	1	4
	特別活動	10	4	12	1	27
	特殊教育	7	3	1	0	11
	保健・養護	8	1	1	0	10
	学習指導	10	0	0	3	13
	視聴覚	3	1	0	0	4
	統計	1	1	0	0	2
備考	教育全般	11	8	5	4	28
	合計	110	70	51	43	274

※過去5年間の応募状況
44年— 133点 47年— 227点
45年— 132点 48年— 197点
46年— 165点

1月の行事

日	曜	行 事
1	水	新年交礼会(市民会館)第20回新春マラソン(公園グラウンド)
2	木	
3	金	市民新春ラグビー交歓会(公園グラウンド)
4	土	官庁ご用始め
5	日	
6	月	
7	火	
8	水	第3学期始業式
9	木	
10	金	定例教育委員会
11	土	教職員交通法令講習会(葵中)
12	日	市民剣道選手権大会(市民体育館)
13	月	学校保健安全資質向上講習会(西三事務所)
14	火	
15	水	<成人の日>成人式(市民会館)
16	木	指導主事学校訪問(岡崎小)
17	金	岡崎市放送教育研究大会(三島小) 県教育センター発表会
18	土	小中学校書初め展(21日まで市美術館) 教頭・教務・校務主任会議講演会/井上隆基先生(岡信本町支店)
19	日	市民駅伝競走大会(県営グラウンド)
20	月	
21	火	福岡小研究発表会 玉川大学通信委託生教育実習(愛宕小)
22	水	定例校長会(婦人会館)
23	木	教育委員学校訪問(藤川小・山中小)
24	金	県生徒指導研究大会(刈谷)
25	土	特殊教育教育相談(婦人会館) 市内高校書道・美術展(28日まで市美術館)
26	日	
27	月	
28	火	
29	水	
30	木	
31	金	



この本を

- 日本の私塾 奈良本辰也
角川文庫 49・5 ￥260
- 師道 小原国芳
玉川大学出版部 49・1 ￥800
- 板書する子どもたち 豊富小学校
明治図書 49・11 ￥1400
- 教育のすべて 福田恒存
高木書房 49・11 ￥1200
- 脳と保育 時実利彦
雷鳥社 49・10 ￥1100
- 禅の話 関 牧翁
毎日新聞社 49・11 ￥750
- さまざまの歌集 梅原 猛
集英社 49・11 ￥980
- 五万石物語 田口城一
東海タイムズ社 49・12 ￥1300
- 江戸雑記帳 村上元三
中央公論社 49・11 ￥880
- 日本の放浪芸 小沢昭一
番町書房 49・10 ￥880

寸 言

昭和五十年、半世紀。長い昭和、短い一生。

卯年・卯月・卯の花・卯毛通し。ことばは遠ざかる。

知命——わが頭上に授かりし天命は何ぞ。天職という語を再びかみしめる。

元日や上々吉のあざき空 一茶
めでたきも中位なりおらが春 一茶
とこしえの太陽が昇る。この初空に心改まる。

●カット 大山 紘 司 (連尺小)